

# 世界を変えよう基金報告書 生物資源学類1年 中村美裕

私が今回参加したカンボジアでのマングローブ植林活動は、現地団体の Cambodian Youth Action(CYA)が運営しており、そこに私の今回の申し込み先である CIEE や、Nice が連携しているものである。CYA の職員とコミュニティの方々と作業内容などを決定していた。

## 1.日程

8/18 羽田出発 (始発では間に合わないため前夜から空港内にいた)・プノンペン到着

8/19 現地受け入れ団体オフィス (空港付近) にてメンバー集合後、活動場所へ移動 (途中昼食や小休憩挟みつつ5時間くらいバスで)



〔←オフィス付近の路地〕

〔道中↓ 未舗装道路〕

〔到着↓ここで生活〕



8/20 オリエンテーション。その後隣接している村訪問

8/21~23 ワーク〔夜は近くの都市カンポットへ ボートの上でビールが飲める↓〕

8/24,25 休日。皆で近場を旅行。楽しかったです。

8/26~30 ワーク

8/31 朝からバスに乗ってプノンペン市内まで戻る。

夜集合、お別れ。

9/1 プノンペン市内観光、日本へ出発。トゥールスレン虐殺博物館やマーケットなどに行った。

〔トゥクトゥク乗車中→〕

市街地から空港への道がとても混んでいて到着が飛行機の時間ギリギリになりとても焦った。

9/2 朝に成田空港に到着。つくばへと戻る。



## 2.作業内容



主に3種類の作業を行った。

1-Seeding…プラスチックポットに泥を詰める・育苗場所に並べる・種を突き刺す。

\*あるフランス人参加者が最も退屈だと言っていた作業。効率を上げようと工夫するところに楽しみを見いだせば、そこまで嫌な作業ではなかった。

2-Planting…ボートで海の方まで苗を運び、植える。

\*目印に使っていたらしい竹の棒の周りに鋭利な殻をもつ貝が付着し、水、泥に埋まっていたのでケガに注意が必要だった。私も軽く足を切ったが、現地リーダーの女の子は初期に膝をパッキリやっしまい、最後まで水に入れなかった。病院では破傷風のワクチンなんかも打たされたそうだ。海の方ならまだしも、特に Seeding の作業場の水などは生活排水も大いに混ざっていて非衛生的だったので少し切り傷は恐かった。現地の人以外はみんな、消毒に気を使った(マキロン等の消毒液を持ってきていなかったので、前のグループが残していったくれたテピカジェルを傷口にすり込んだ。)

3-Collecting…ボートで大きいマングローブの林に行き、種を探し、採る。

\*私はなかなか見つけられず苦戦したが、コミュニティの方は、あっという間に、驚くほど大量に持って帰ってくる。木に登ってどんどん採っていた。ただ、木には蟻が大量にいることがあるので(カンボジアの蟻に噛まれるとわりと痛い)、なぜ彼らがあんなに林の奥で行けるのか不思議だ。すごかった。ちなみに、マングローブの種は形が特殊で面白い。写真は撮り忘れた。

## 3.ボランティアメンバー

日本人 前半5人 後半は+2人 カンボジア人 3人 スペイン人 1人 フランス人 1人

(+コミュニティの人(ここで生活しているひと)) コミュニティの方は英語を全く話さなかった。だから、本やカンボジアボランティアメンバーから教わった片言のクメール語で、「こんにちは」「おなかすいた」「眠い」「すごい!」「1,2,3,…」など簡単なことだけを伝えた。あとはとりあえず言葉無しでコミュニケーションをとったが、これも楽しかった。すぐ顔に泥をつけようとしてくる方や、私の肘あたりの大きい絆創膏を貼った傷をいたずらっぽい顔でツンツンしてきた方などがいて、私が怒ったような顔や何らかのリアクションをすると笑ってくれたし、傷ツンツンおじさんは「てへっ」という顔をしてきて、憎めなかった。言葉が通じないと子供みたいなコミュニケーションになって、それはそれで楽しいことを知った。日焼けの似合うダンディなおじさんなどかっこいい人もいたが、全体的に、奔放で愉快的な人々だった。また、いつも子供が思いっきり楽しそうに遊んでいて、かわいかった。

## 4.生活面について



〔←食卓を囲む様子〕料理は現地受け入れ団体職員の女の子が全てを指揮し、私達はその手伝いをした。朝近くの市場に行き、朝食分はテイクアウトで、昼・夜の分の食材を調達した。衛生環境の良くない市場だった（一度買い物に付いて行ったが、刺激的な空間だった）ので、

料理の時は肉も魚も野菜もしっかりと水で洗わされた。カンボジア料理は多少脂っぽいものの、とても美味しかった。（日本人メンバーはみんな一度はお腹を壊したが。）

寝る場所もマットレスは柔らかかったし、シャワーは水だけれども、トイレも汚くなかった。生活環境はそこまで悪くなかった。電気も通っている。十分快適だった。

しかし、気になることもあった。生活排水がそのまま垂れ流しである点と、ごみの処理の問題だ。まず生活排水については、トイレからの排水だけは浄化槽のようなところに繋がっていたが、あとはそのまま外に流していた。このバンガロー群は川のすぐ隣にあって、外側の方は水の上、内側は浅い水または泥の上に位置していたので、内側の方にあるキッチンやシャワーの排水は泥・浅い水の上について、歯磨きした水などは川に吐き出す形だった。キッチンの下の泥場には鶏がいて、少しの食べ残しは鶏のほうに投げた。油物のフライパンや食器を洗った水も普通にそのまま外に流した。できるだけ油はゴミ箱に行くように拭きとるなどの工夫もしたが、取り切れない油分は流れてしまっていた。内側の方の水は入れ替わりがゆっくりだから、茶色い水の表面には常にすこしこげ茶の泡が常にある感じだった。次にゴミ処理について。日本のようにゴミ収集車が来て、処理場で燃やしてくれるわけではないので、全部一緒に少しづつ燃やしていた。ビンとカンさえ分別せず、生ごみも紙ごみもプラスチックもすべてが一緒になったゴミ袋の山がトイレ裏にあり、そこでそのまま火をつけることもあるようで、山の一部分が灰になっていたり黒くなったりしていた。もちろん、ダイオキシンなど体に有害なガスが発生している可能性は高い。炭火での串焼きをしたときの着火剤はビニールごみだったので（カンボジアの大学生で、ダイオキシンは知っているけど火をつけるときだけだからいいでしょ、と言っていた）、カンボジアの人々はプラスチックごみをふつうに燃やすことに抵抗はないようだ。

## 5. まとめ

やはり強く印象に残ったものの一つは、プラスチックだ。近くの村に訪問したとき、のどかな雰囲気と自然に似合わず、プラスチックごみが散乱していた。一昔前までは葉っぱのお皿を使っていたが、プラスチックを使うようになり、これは分解されないが今までと同様に土の上に捨てているようだ。陸にあるならもちろん海にもある。マングローブ林には、ペットボトルをはじめとする容器プラスチックごみが多数ひっかかっていた。ストローを使うのをやめようだとか、レジ袋の有料化だとか、世界的にプラスチックの削減が進んでいるよ

うな気でいたが、カンボジアではそんなことは全くなかった。今回私は、この他にも様々な点で(例えば交通だとか衛生面だとか)、先進国と途上国の間には、この呼び方の通りの違いがたしかにあるということ、痛感した。

それから、ボランティア活動の難しさも少しわかった気がする。実はマングローブの苗を植えるとき、波があるから安定しないという理由で、プラスチックポットから出さなかった(出して植えたいと言ってみたものの、厳しいといわれた)。根はそれを突き破って伸びるので問題ないが、用済みのプラスチックポットはマイクロプラスチックとなって結果環境破壊につながるのではないかと思ってしまった。私達は環境保護のボランティアに参加したわけで、確かにマングローブを増やす活動を行ったが、人が来ればゴミがでるし調理で使う油は増えるし、肝心の植林でも、海にプラスチックを増やしてしまったという側面は否めないのではないだろうか。私たちの参加によりお金が落とせて現地の方の生活が豊かになったり一層植林を進められたりするのはもちろん嬉しいことだが、なかなか真に環境保護に貢献できたのかということを見ると、難しいなと思った。ただ、これまでのマングローブの植林により漁業資源は復活しているそうなので、私たちの活動が全く無意味だとは思っていないし、自分の地域を改善するために現地の人々が動くことはとても尊いことだと思う。現地の人々がこのコミュニティに誇りを持ち、もっと良くしていこうとしている姿には感動した。また、参加者の一人のカンボジア人大学生がビールを飲みながら「昔、僕はなぜこんな国に生まれてきてしまったのだろうと思っていた。でも今は、僕はこの国をよくするためにここに生まれたと知っている。」と言ったのを聞いたときも感動した。昔は日本人も、この国を良くしようという強い気持ちで満ち満ちていた時代があったそうだから、カンボジアは今その段階にあるだけなのかもしれない。でも、豊かな国で育ち、自分の国を良くしたいなどはあまり考えてこなかった私としては、たとえ酔っ払いでも、彼がかっこよくて、少し憧れた。日本にも様々な問題はあるのだから、そういう国内のことにもこれからはもっと注目していきたいし、まずは身近なところから行動できる人になりたいなと思った。

今回のような経験ができたことを忘れずに、これからの大学生活、そしてその後を過ごしていきたい。カンボジアのあの空気感は忘れたくないし、今回友達になった人々とも繋がりを絶やさないようにしたいと思う。有難いことに、SNSの便利さはおそろしい。ただ、行く前と行った後で、人生がガラリと変わるような価値観の変化だとか自分にもすごいスペックが身についたとか英語力が格段に上がったとか、そういうことはない。将来自分は何をしたいのか、今すべきことは何か、という点がますますわからなくなったというのが正直なところだ。しかし、得たものは大きい。それは胸を張って言える。

まだまだ書ききれていないことは山ほどあるが(休日のtripなど、現地の人に案内してもらえらるわけだから、最高だった)、これくらいで終わろうと思う。もし、この駄文を読んで、カンボジアに行ってみたいと思った人がいたら、よく気を付けて、ぜひ行ってほしい。とにかく行ってみないとわからない、という使い古されたセリフは的を射ていることを身をもって知った。ほんとうにほんとうに、最高に刺激的な楽しい2週間だった。

## 6. 最後に

まずなにより、鈴木教授、本当にありがとうございました。安全面など様々な点で助言もく  
ださり、とても助かりました。自分一人で勝手に申し込んだプロジェクトであり、初の途上  
国&一人海外だったのでやはり不安でしたが、教授に何度かお会いしてカンボジアについ  
ての話もさせて頂き、心強かったです。今回の世界を変えよう基金からの支援を今後にもつ  
なげられるように、頑張っていきます。次に、プロジェクト参加のための資金を貸してくれ  
た両親、応援してくれた祖父母や兄弟、友人に感謝したいです。そして、2週間の中で出会  
った、一緒に過ごした全ての人達に感謝しています。អរគុណ(オークン・チュラウン、  
心からありがとう)!!!!